

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者：40歳代・女性

病名：左被殻出血後遺症

入院期間：令和6年2月中旬 ～ 令和6年3月下旬

経過：母子家庭で学生の息子さんと二人暮らしされており就業しておりました。R5年8月に就業中に左被殻出血を発症し救急病院へ救急搬送され、9月に回復期病院へ転院。R6年2月に発症180日となりリハビリ継続目的に当院へ転院となりました。前医からは歩行の確立は実用的でなく、息子さんが若く介護力が見込めないため退院の為には障害者住宅への引っ越しが必要であるとの申し送りでした。当院転院後チームアプローチにより約40日で短距離の4点杖での歩行が自立し、発症前に生活していたアパートに退院することができた症例です。

地域包括ケア病棟40日退院のモデルとなる症例となりました。

内 容

母子家庭で学生の息子さんと二人暮らしをしておりましたが、R5年8月に就業中に左被殻出血を発症し救急病院へ搬送となりました。9月に右片麻痺、失語症の障害が残存し回復期病院へ転院。発症180日までリハビリを実施しましたが、右片麻痺が重度であり、新しい動作に対する恐怖心が強く歩行の自立は難しいと判断され、主介護者となる息子さんも翌年度に就職を控えており介護力としては期待できないため、自宅退院の為には障害者住宅への引っ越しが必要と説明を受け、リハビリ継続目的に当院へ転院となりました。

当院入院時の評価で、右片麻痺の改善は見込めないが4点杖での短距離の歩行及び介助による段差の昇降は十分実用的に可能となる見込みがあり、屋内の移動を車いすと歩行を組み合わせることで介護保険サービスを利用して現在の住居に退院することは可能であると判断しました。主治医より息子さんに現在の自宅への退院の可能性を説明すると、「前医ではほとんど面会ができずどのくらい動けるかもわからなかったこと」、「引っ越しが必要でないのであれば、早く母に帰ってきてもらいたいと思っている事」がわかり息子さんの春休み期間中に自宅への退院を目指すことになりました。

主治医は全体の進捗を管理し息子さんに伝え息子さんの精神的支えとなる事、ご本人は新しいことに恐怖を持ちやすいため、看護師がご本人の精神的不安を解消し安心できる環境の提供に努めるこ

と、リハビリでは短距離の歩行と段差の昇降、日中独居での生活動作の確認および将来的に家事動作などができるようになる可能性を示唆することによる意識の改革、書字およびコミュニケーション能力の向上、相談員は当院内事業所のケアマネージャーと連携し退院後に安心して生活できるサービスの調整を行うことを進めていきました。

実際に取り組みを始めてみると、運動療法としてニューステップを導入するとともに運動が好きだったこともあり恐怖を訴えることなく笑顔で積極的に取り組む姿がみられ、右片麻痺の方が家事を行っている動画を見ていただくと「自分も料理をしてみたい」と前向きな発言がみられるようになり、2週間程度の介入で4点杖+短下肢装具での歩行が見守りで可能となりました。構音障害、喚語困難、声量不足で言語でのコミュニケーションは伝わりづらいことがみられましたが、書字の上達により筆談を交えたコミュニケーションが安定して行えるようになり病棟で職員と笑顔で話す姿がみられるようになりました。入院4週目にケアマネと退院前訪問を実施し自宅での生活を想定した練習を行いました。

結果入院40日で予定通り自宅へ退院となり、現在は日中独居で介護タクシーを利用し当院の外来診療にいらしております。